

幼 児 の 教 育

昭 和 二 十 年 六 月

言 葉

——保姆諸君と語る——（六）

倉 橋 惣 三

子どもの言葉の躰けを大層きびしくいふ人がある。子どももきれいな言葉を使ふに越したことはないが、要するに言葉である。そうく／＼やかましくいはなくてもいゝいふ人もある。私の説はご聞かれゝば、さよう、ミ一寸首をかしげて見せて、いづれにしても、そんなに本質的な教育問題でもありませんまいがミ、われながら瞬眼な返事をするであらう。言葉つかひより、もつミ内面の大切な問題が澤山あるからである。ミころが、これは子どもの方に就いての話である。翻つて保姆さんの方の話ミしては、その言葉つかひは相當大きな問題である。以下少々申し述べさせていたゞきたいミ存じます。

子どもの耳に、否、心に對して一番悪い言葉は語氣のあらさである。一語々々の選擇が一應行き届いてゐても、その言ひ方の語調にやわらかみを缺いてゐる言葉は、子

ぎもの心を、初めは驚かし、次には不快にし、やがては呆れさせる。そのあらい語氣はさういふ時出るものか。相手にも
のいふてゐることを忘れて、自分の心を爆發させてゐる時である。爆發は、内の力が強いさういふよりも、抑へ力が無いさ
ういふてゐる。だから、われわれを抑へる慎みを失つてゐるさういふ點で、はしたない譯にもなるのである。そして、自ら
の威嚴を失墜するのである。遂には、幼い子ぎもにまで侮られる。語氣では強いが、その語氣を強くする前に先づ負けて
ゐるのだからである。

次には、氣の抜けた言葉さういふのがある。その語氣は、あらいさういふところか極く穩かである。が、そこに何んの心の響きも
ない。多くは至つて美しい、やさしげな言葉である。が、そこに何んの實もなく味もない。あの、客扱ひを業とするもの
なごに空世辭さういふことがある。世辭であつてもなくても、空たるこゝに於て全く同じである。殊に、中味が無い言葉に
限つて、語意も語調も誇張的なのが常である。語氣があらいのに對して、語調が大きいさういふてもよい。そこで、子ぎも
の心を、初めは一寸喜ばせ、次に失望させ、終に腹立たしくさへさせる。そこには誠實が無いからである。甚しきは、先
生のその大きい語調に驚いて先生を見上げるさういふ、先生の目は、全くよそを向いてゐるこゝがある。明かに他のこゝを考へて
ゐながら、言葉だけその場にあはせてゐるさういふ見えるこゝがある。子ぎもを相手にして、その位のこゝで結構始末がつくさ
ういふ譯なのかも知れないが、子ぎもの心は、そのたんび、お蔭さまで虚にさせられる。さぞかし、いやな先生ださういふ、つく
づく思ふさういふこゝでもあらう。

次に又、はなへし言葉さういふものがある。これは語氣、語調でなく、語勢さういふものであらうが、相手の

心に妙にぶつかつて、拒んで、退けて、受け容れる代りにはねかへすのである。語勢といふ通り、その勢は初めから勝たうとし、少くも負けまいとし、「そーを」に迎へる代りに、「え」に追ひかへす。この種の言葉が、相手を親しませないのは素よりである。人間と人間とが言葉を交はすのは、何を兎もあれ、その度毎に、親しみを増してゆく筈のものである。それが、はねかへしづめでは、親しまうにも親しめないであらう。況して、相手は幼い子とも、縮み上つても仕舞ふであらう。あの、なさけなそうな顔がその證據である。そこで、つい持ち前のはねかへしを悔いて、濟まなかつたと思つて、次の言葉で取りなしてゆく人もあるが、甚しいのでは、相手のそのさまを、いさ快しにするのもある。可愛そうなのは、そんな目にあはされる子ともであるが、それ以上、子ともも亦いつの間にか、そんな言葉をつかふように癖づけられてゆく。

顔つき、目つきは鏡にうつして見て、自ら矯正し、戒慎することも出来る。語氣、語調、語勢に於いては、さうも自分に心つき難いものである。それ以上、初めの持ち前が、だん／＼募り上つてゆくものである。しかも、相手、殊に幼児達に對して、強く影響するもの言葉の如きはない。その氣も調も勢もつまりは、耳から頭へびんさ來るものだからである。

その上、語氣も語調も語勢も、聴き手の心をしてそれに慣れしめ、平氣にさせ、つまりは相手をもそうして仕舞はずに措かない。すなはち、相手を感化すること、此位強いものはないともいへるのである。言葉の問題が言葉の種類、品質の選擇に限られることが多いが、それは、いつでも取りかへられるものであるが、語氣、語調、語勢に至つては、言葉そのものよりも、その言葉の持ち主の方に屬すること、一旦附いた習癖は容易に取りかへられない。その意味で、幼兒の問題として重要ならざるを得ないのである。

さて、こんな風に考へて見る時、もつ／＼いろいろな注意すべきことが、私達の常の言葉にあるかも知れない。